

日本英語学会
第 27 回 大会 資料 ・ プ ロ グ ラ ム

The Twenty-Seventh Conference
of
The English Linguistic Society
of Japan

2009 年

11 月 14 日 (土) — 15 日 (日)

大阪大学 豊中キャンパス

(Osaka University, Toyonaka Campus)

(〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5)

The English Linguistic Society of Japan

大阪大学豊中キャンパスアクセスマップ



利用交通機関

○電車：阪急電車宝塚線・石橋駅（特急・急行停車）下車 東へ徒歩約15分

○モノレール：大阪モノレール・柴原駅下車 西へ徒歩約10分

第 27 回 大会 スケジュール

- 11 月 14 日 (土) 9:30 ~ 12:00 ワークショップ
9:30 ~ 12:00 スチューデント・ワークショップ
12:00 受付開始
12:50 ~ 13:35 総会
13:45 ~ 16:55 研究発表
17:40 ~ 19:40 懇親会
(学生交流棟 1F カフェ&レストラン「宙 (Sora)」)
- 11 月 15 日 (日) 9:15 受付開始
9:45 ~ 12:20 研究発表
13:45 ~ 16:30 シンポジウム

大会 運営 委員

加賀信広 (委員長) 水口志乃扶 (副委員長)
石川一久 奥 聡 武田修一 内堀朝子 木口寛久 滝沢直宏
太田 聡 菊地 朗 塩原佳世乃 中谷健太郎 鍋島弘治朗 藤井洋子

開催 校 委員

大庭幸男 (代表) 上田 功 大森文字 岡田禎之 岡田伸夫
加藤正治 杉本孝司 早瀬尚子 三原健一 宮本陽一 由本陽子 渡辺秀樹

- 受付で大会参加費 2,000 円と引き換えに、Conference Handbook と名札をお受け取り下さい。
(非会員の方も参加できます。)
- 大会期間中 (14 日・15 日) は車でのご来場はできません。
- 14 日のみ、昼食時に学内の食堂・コンビニエンスストアがご利用になれます。15 日は、事前予約制で弁当を販売いたします。15 日に弁当をご希望の方は、14 日に受付で引換券をご購入下さい。
- キャンパス (校舎内および通路) は禁煙です。会場でのトイレにつきましては、本冊子「会場案内図」や会場の掲示にて位置をお確かめのうえご利用下さい。
- 今大会の Proceedings である JELS 27 の購入申し込みを大会受付にて承ります。JELS は本大会会場でのみ購入の申し込みを受け付けることとなっておりますのでご注意ください。
- 大会会場に「親と子の部屋」という保育室を設けます (事前予約制)。「親と子の部屋」の詳細につきましては、事務局にお問い合わせ下さい。
- 大会期間中に不測の事態が生じた場合は本部までご連絡をお願いいたします。

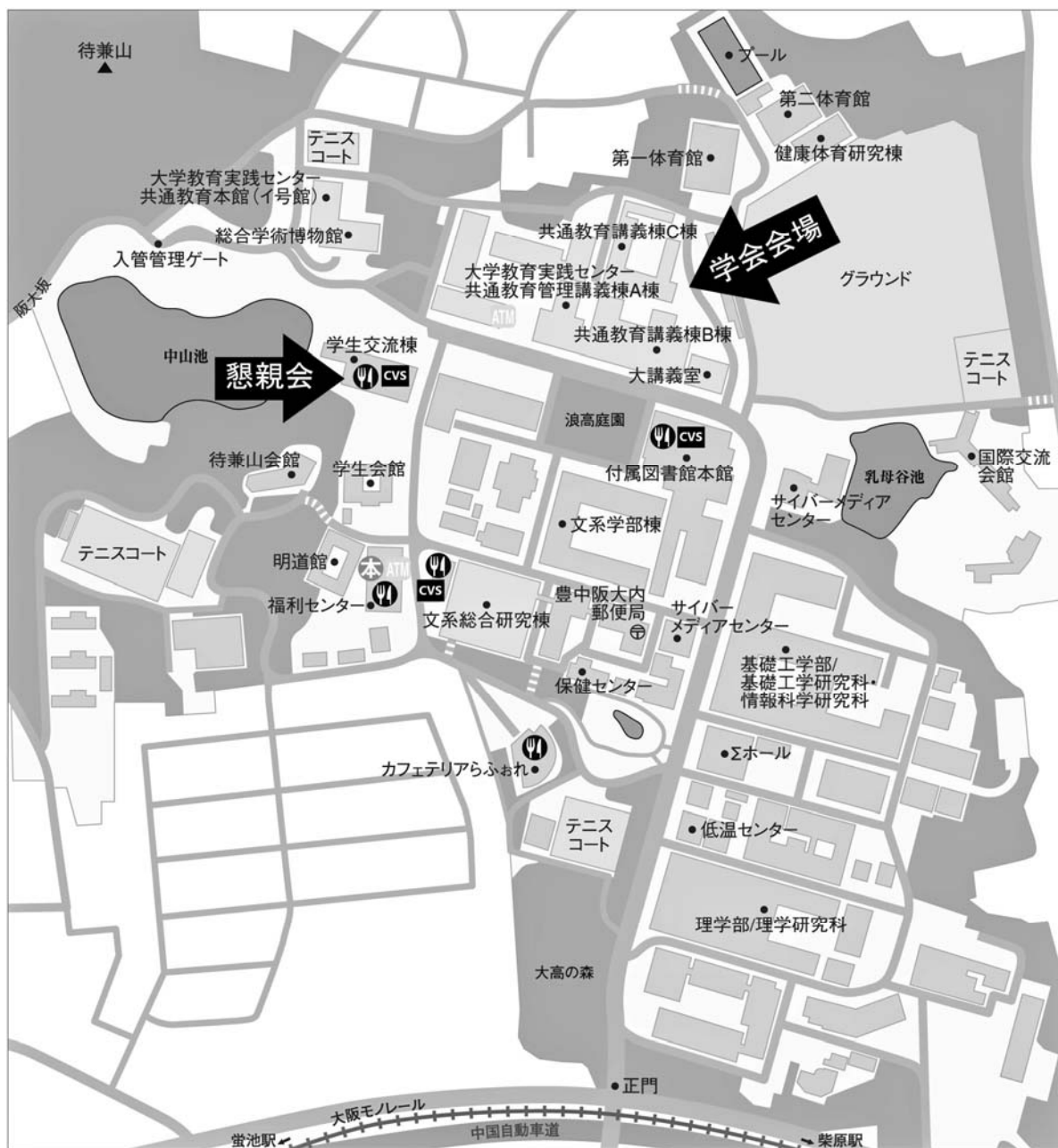
会場案内

大阪大学 (〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5)

受付			共通教育講義棟 B 棟 (以下「B 棟」)	1 階フロア
本部			共通教育管理講義棟 A 棟 (以下「A 棟」)	A104 講義室
控室	開催校委員控室 司会者・発表者・講師控室 一般控室 書籍展示・販売		A 棟 A 棟 A 棟 共通教育講義棟 C 棟 (以下「C 棟」)	A114 講義室 A101 講義室 A102 講義室 C104~C106 講義室
第 1 日午前 (9:30~12:00)	<ワークショップ> <スチューデント・ ワークショップ>	第 1 室 第 2 室 第 3 室	B 棟 B 棟 B 棟	B118 講義室 B107 講義室 B108 講義室
第 1 日午後 (13:45~16:55)	<研究発表>	第一室 第二室 第三室 第四室	B 棟 C 棟 C 棟	大講義室 B118 講義室 C402 講義室 C408 講義室
第 2 日午前 (9:45~12:20)	<研究発表>	第五室 第六室 第七室 第八室	B 棟 C 棟 C 棟	大講義室 B118 講義室 C402 講義室 C408 講義室
第 2 日午後 (13:45~16:30)	<シンポジウム>	A 室 B 室 C 室 D 室 E 室 F 室	B 棟 B 棟 B 棟 C 棟 C 棟	大講義室 B118 講義室 B108 講義室 B218 講義室 C402 講義室 C408 講義室

総会	11 月 14 日 (土) 12 : 50 ~ 13 : 35	B 棟	B118 講義室
懇親会	11 月 14 日 (土) 17 : 40 ~ 19 : 40 会費 : 4,000 円 (学生 3,000 円)	学生交流棟 1F カフェ&レストラン 「宙 (Sora)」	

大阪大学豊中キャンパス案内図



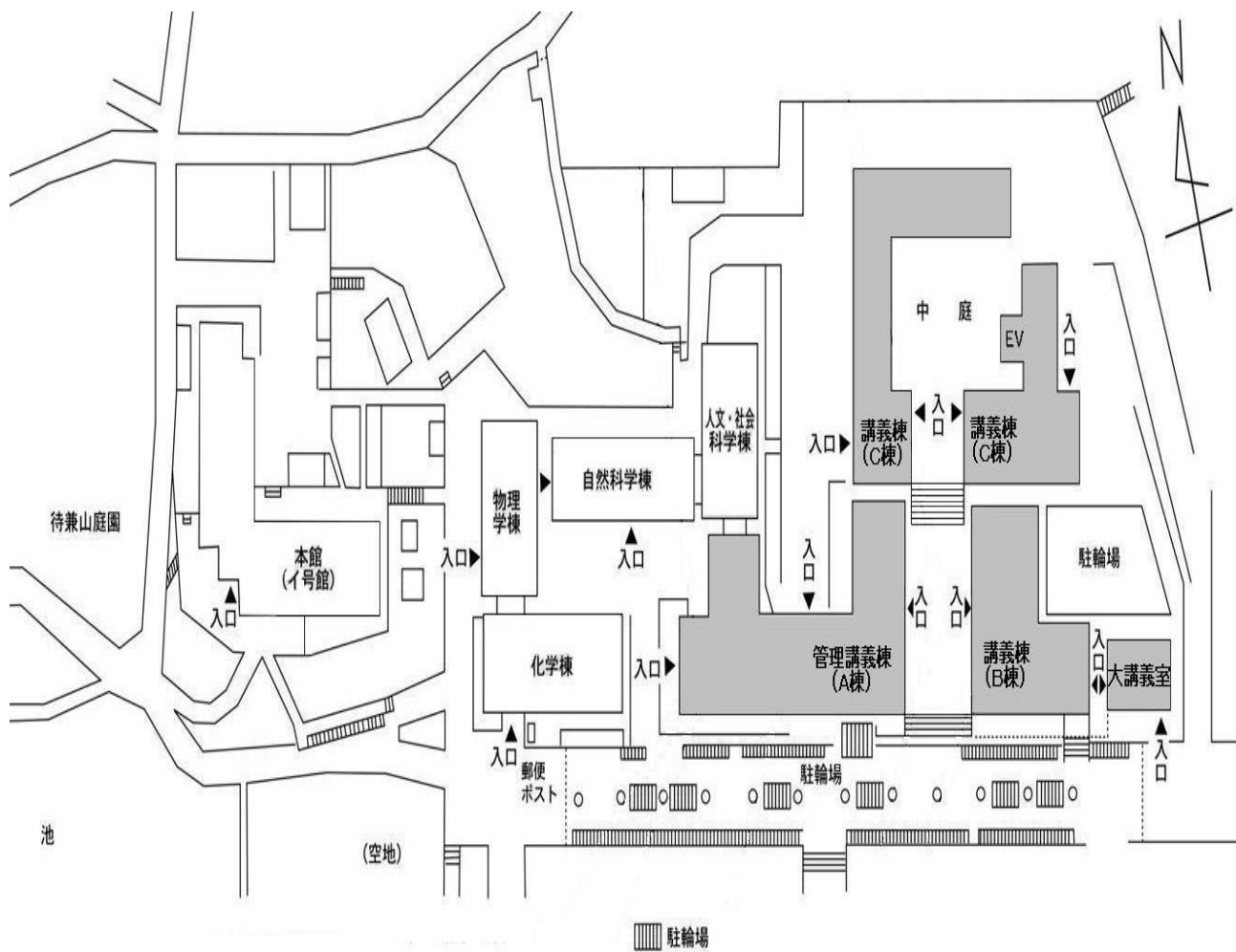
: レストラン



: コンビニエンスストア

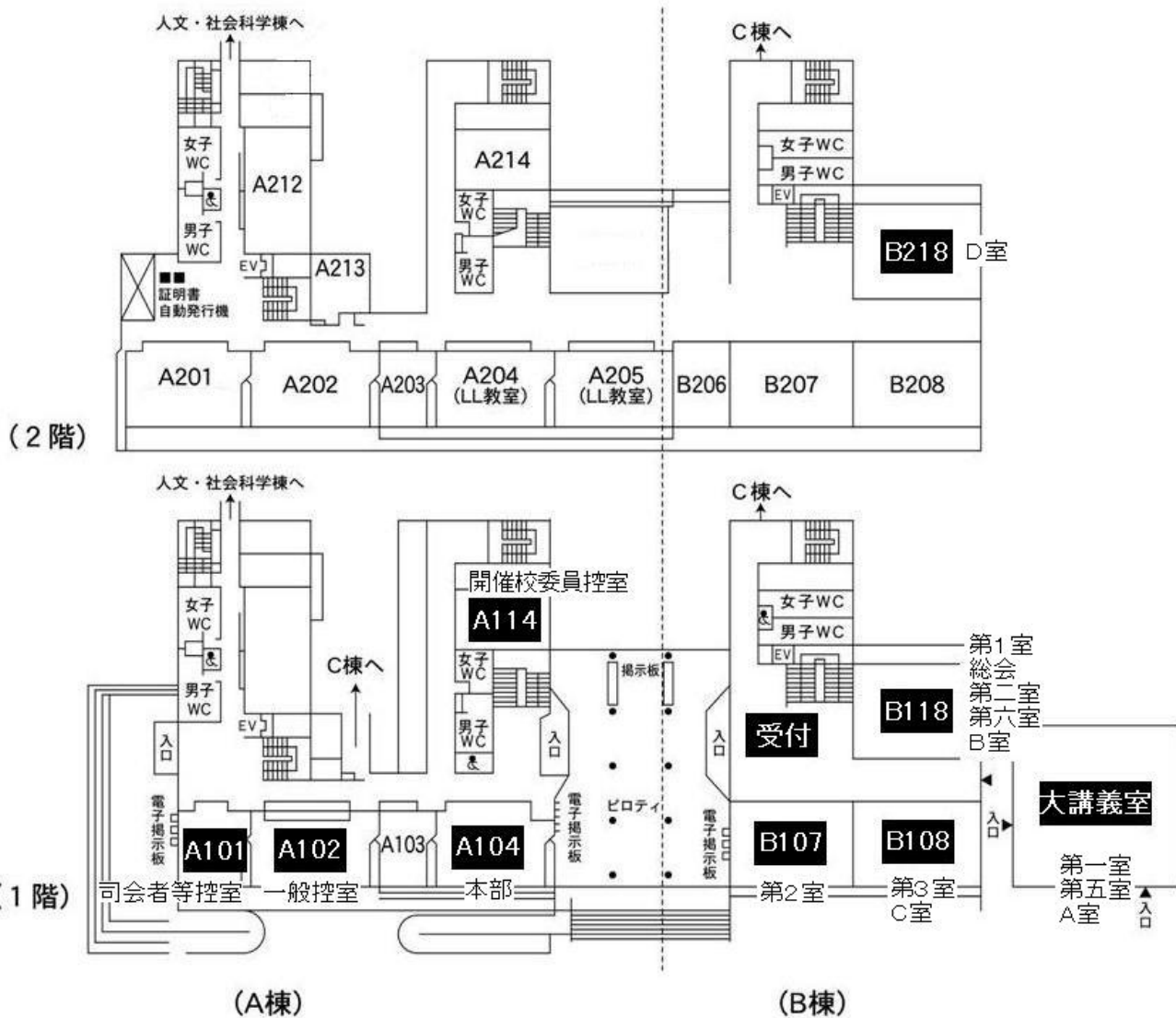
※ともに14日(土)のみ利用可。14日の各レストラン・コンビニエンスストアの営業時間については、当日受付にてご確認下さい。

大学教育実践センター建物配置図

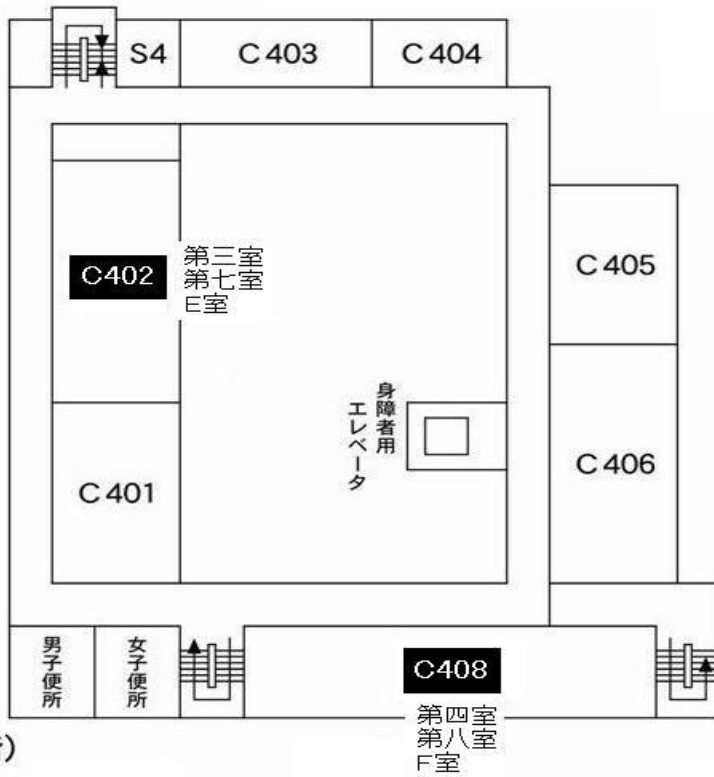


会場案内図

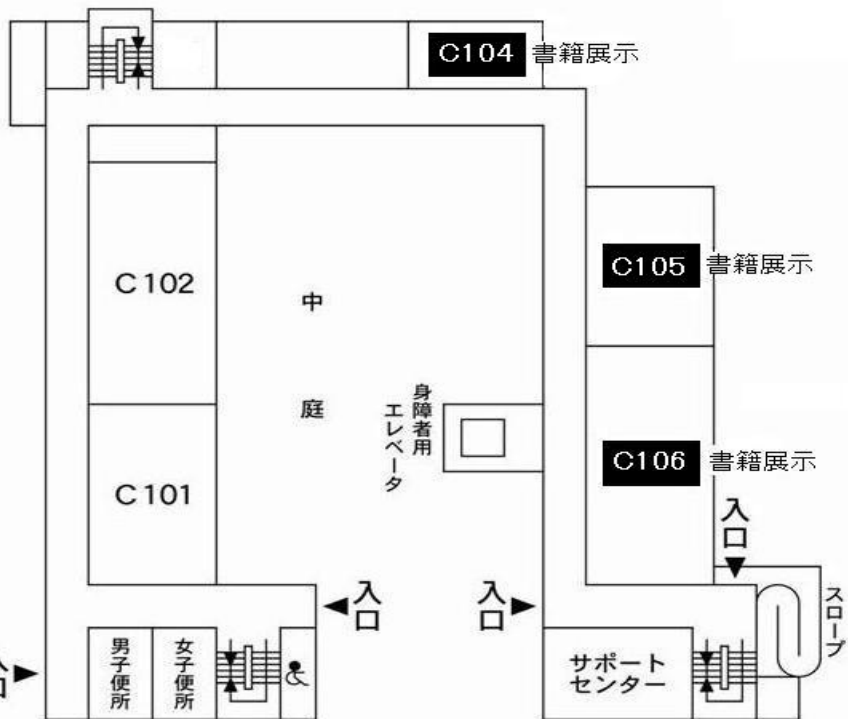
共通教育管理講義棟 (A棟)・(B棟)



共通教育講義棟 (C棟)



(4階)



(1階)

第 27 回 大会 プ ロ グ ラ ム

日本英語学会

第 1 日 11 月 14 日 (土)

ワークショップ 9 時 30 分より 12 時まで

第 1 室 「格の今とこれから：近年の研究成果と理論的動向から格を見つめ直す」

(B 棟 B118 講義室)

企画者 内芝慎也 (無所属)

スチューデント・ワークショップ 9 時 30 分より 12 時まで

第 2 室 「日英語相互行為における伝達スタイルの比較—発信と受信の両面から—」

(B 棟 B107 講義室)

企画者 松本奈津子 (日本女子大学大学院)

第 3 室 「五感と時間：英語知覚表現の諸相」

(B 棟 B108 講義室)

企画者 吉川正人 (慶応義塾大学大学院)

このワークショップのプログラムは応募された企画書に基づくものです。
正式なタイトル、発表者については別紙のワークショップ・プログラムをご覧ください。

受 付 正午より

(B 棟 1 階フロア)

総 会 12 時 50 分より 13 時 35 分まで

(B 棟 B118 講義室)

◇開会の辞 会 長 原口庄輔 (明海大学)

◇開催校代表挨拶 大阪大学大学院文学研究科長 江川 温

◇委員会・事務局報告

大会運営委員会報告 委 員 長 加賀信広 (筑波大学)

編集委員会報告 委 員 長 今西典子 (東京大学)

広報委員会報告 委 員 長 大庭幸男 (大阪大学)

事務局報告 事務局長 岡崎正男 (茨城大学)

◇各賞選考委員会報告

特別賞選考委員会報告 委 員 長 河上誓作 (神戸女子大学)

学会賞選考委員会報告 委 員 長 中村 捷 (東洋英和女学院大学)

※特別賞・学会賞については、受賞者が出た場合には、各賞の授賞式も行います。

研究発表 13時45分より16時55分まで

第一室

(大講義室)

司会 太田 聡 (山口大学)

13:45 内芝慎也 (無所属)

“Preposition Stranding and Phonological Phrasing in English”
「アルファベット頭文字語の音韻構造」

14:20 窪菌晴夫 (神戸大学) [招聘]

14:55~15:10 休憩

司会 内堀朝子 (日本大学)

15:10 嶋村貢志 (大阪大学大学院)

“EPP as Selectional T-feature Satisfaction and Dative Subject Construction in Japanese”

15:45 大澤聡子 (鈴鹿医療科学大学)

「小節内の EPP 現象」

16:20 阿部 潤 (東北学院大学) [招聘]

“The EPP and Subject Extraction”

第二室

(B 棟 B118 講義室)

司会 菊地 朗 (東北大学)

13:45 北田伸一 (東北大学大学院)

“Feature Inheritance and A/A' Properties of Non-DP Subjects”

14:20 水口 学 (長野工業高等専門学校)

“Non-canonical Agreement: Its Implications for Case/ ϕ -feature Checking”

14:55~15:10 休憩

司会 塩原佳世乃 (文京学院大学)

15:10 本多正敏 (神田外語大学)

「英語における分裂文の焦点移動分析—統語構造地図の観点から—」

15:45 村田和久 (大阪大学大学院)

「助動詞選択と非対格性」

16:20 中戸照恵 (東京大学)

「相互表現の獲得について—ミニマリスト・プログラムに基づく考察」

第三室

(C 棟 C402 講義室)

司会 石川一久 (愛知学院大学)

13:45 渡辺拓人 (大阪大学大学院)

「18世紀の小説における be about to の発達について」

14:20 茨木正志郎 (名古屋大学大学院)

「英語史における属格の発達について」

14:55~15:10 休憩

司会 水口志乃扶 (神戸大学)

15:10 田中拓郎 (日本大学)

“Floating *Many* in Japanese”

15:45 西原俊明 (長崎大学)

「Time-away 構文について」

16:20 蔵藤健雄 (立命館大学) [招聘]

「程度表現への動的アプローチ」

第四室

(C 棟 C408 講義室)

司会 武田修一 (静岡県立大学)

13:45 志澤 剛 (筑波大学大学院)

「Adnominal Conditionals の意味論・語用論的認可条件」

14:20 海寶康臣 (立命館大学)

「英語の右方転位構文・日本語の後置文と話し手の論理・聞き手の論理」

14:55~15:10 休憩

- 司会 藤井洋子 (日本女子大学)
- 15:10 山本尚子 (奈良女子大学大学院) 『『A が A だ』構文に関する基礎的考察』
- 15:45 西山淳子 (立命館大学) 「英語と日本語の過去形の状態表現」
- 16:20 高梨博子 (日本女子大学) “Investment of Meaning in Discourse: Intertextuality through Resonance”

懇親会 17時40分より19時40分まで
 カフェ&レストラン「宙 (Sora)」(学生交流棟 1F)
 会費: 4,000 円 (学生 3,000 円)

第2日 11月15日 (日)

午 前

受付 9時15分より (B棟1階フロア)

研究発表 9時45分より12時20分まで

第五室 (大講義室)

- 司会 中谷健太郎 (甲南大学)
- 9:45 吉川裕介 (佛教大学) 「非下位範疇化場所格目的語の意味機能について」
- 10:20 板東美智子 (滋賀大学) 「接触・打撃動詞の心理述語用法について」
- 10:55~11:10 休憩
- 司会 木口寛久 (宮城学院女子大学)
- 11:10 本田隆裕 (大阪大学大学院) “SPEC-T in Passive Constructions”
- 11:45 青柳 宏 (南山大学) [招聘] “On the Asymmetry in Passives between Japanese and Korean”

第六室 (B棟B118講義室)

- 司会 奥 聡 (北海道大学)
- 9:45 川原功司 (University of York 大学院) “Visible Scope Economy in Comparison”
- 10:20 島 越郎 (東北大学) 「LF コピーと PF 削除による省略文の分析」
- 10:55~11:10 休憩
- 司会 廣瀬幸生 (筑波大学)
- 11:10 福田 稔 (宮崎公立大学) 「WH 感嘆句の派生と機能」
- 11:45 片岡邦好 (愛知大学) [招聘] 「問題解決談話における日・英語話者の視線について」

第七室 (C棟C402講義室)

- 司会 滝沢直宏 (名古屋大学)
- 9:45 成岡恵子 (東洋大学) 「指示表現の選択と情意: 英語会話データにおいて」
- 10:20 金澤俊吾 (岩手県立大学) 「なぜ I sat in the bath tub, soaping a meditative foot. は転移修飾表現として解釈できるのか」
- 10:55~11:10 休憩

- 司会 鍋島弘治朗 (関西大学)
- 11:10 清水康樹 (東北大学大学院) 「英語の到達経路表現における前置詞のプロファイル」
- 11:45 高木 勇 (京都大学大学院) 「There-アマルガムのサブタイプとそれぞれの意味・機能」

第八室

(C 棟 C408 講義室)

- 司会 有村兼彬 (甲南大学)
- 9:45 小畑美貴 (University of Michigan 大学院) “How to Move Syntactic Objects Bigger than a Phase: On the Formal Nature of Transfer and Phasal RE-Assembly”
- 10:20 Hideki Maki (Gifu University) and Kenichi Goto (Gifu University) “The Semipermeable Membrane Theory in Syntax” (E)
- 10:55~11:10 休憩
- 司会 岸本秀樹 (神戸大学)
- 11:10 中村太一 (東北大学大学院) 「謙讓化と介在効果」
- 11:45 森田順也 (金城学院大学) [招聘] 「統語一形態の相互関係と形態的制約」

午 後

シンポジウム 13時45分より16時30分まで

A 室 Experimental Syntax: What We Can Expect, and What We Cannot (E) (大講義室)

- 司会 Hiromu Sakai (Hiroshima University)
- 講師 Colin Phillips (University of Maryland) “Real-time Syntactic Computation”
- 講師 Masatoshi Koizumi (Tohoku University) “Experimental Syntax: What We Can Expect”
- 講師 Hiromu Sakai (Hiroshima University) “What We Cannot Expect from Experimental Syntax”
- 講師 Koji Fujita (Kyoto University) “Experimental Syntax for Biolinguistics?”

B 室 これからのコロケーション研究 (公開) (B 棟 B118 講義室)

- 司会 堀 正広 (熊本学園大学)
- 講師 堀 正広 (熊本学園大学) 「これからのコロケーション研究」
- 講師 渡辺秀樹 (大阪大学) 「英語史とコロケーション研究」
- 講師 赤野一郎 (京都外国語大学) 「コロケーションと辞書—英和辞典を例に」
- 講師 田畑智司 (大阪大学) 「文体意匠としてのコロケーション—Dickens における *gentleman*—」
- 講師 小屋多恵子 (法政大学) 「コロケーションと英語教育」

C 室 言語を通してみるインターアクションと文化の相同性—日英相互行為比較—

(B 棟 B108 講義室)

- 司会 井上逸兵 (慶應義塾大学)
- 講師 井上逸兵 (慶應義塾大学) 「コンテキスト化の資源と相互行為の型」
- 講師 阿部圭子 (共立女子大学) 「助言談話の日米比較研究」
- 講師 片桐恭弘 (公立ほこだて未来大学) 「インタラクション行動の文化パラメーター—解放的語用論の試み—」
- 講師 井出祥子 (日本女子大学) 「認識論から存在論の言語学へ：場の言語学への招待」

D室 Old Problems with New Insights—日本語母語話者の英語習得に見られるマッピングの問題について (B棟 B218 講義室)

- 司会 中山峰治 (The Ohio State University)
- 講師 中山峰治 (The Ohio State University) 「はじめに (概論—Old Problems with New Insights)」
- 講師 John Matthews (Chuo University) “Mapping Segments to Prosody as the Acquisition of L2 Phonology Progresses” (E)
- 講師 吉村紀子 (静岡県立大学)・中山峰治 (The Ohio State University)
「日本語母語話者にとって3人称単数-sはなぜwh移動よりむずかしいのか？」
- 講師 稲垣俊史 (大阪府立大学) 「日本語母語話者にとって英語の可算名詞と不可算名詞の区別はなぜ困難か」

E室 Invariance and Variability in OT (C棟 C402 講義室)

- 司会 北原真冬 (早稲田大学)
- 講師 深澤はるか (慶應義塾大学) “Invariant Factors in the Core System of OT”
- 講師 田中伸一 (東京大学) “Rethinking the GEN Component: Typological Consequences in Parallel and Serial OT”
- 講師 栗栖和孝 (神戸女学院大学) “Exceptions in Optimality Theory”
- 講師 北原真冬 (早稲田大学) “Probabilities Come in When Talking about Variability”

F室 メタファーと主観性 (C棟 C408 講義室)

- 司会 谷口一美 (大阪教育大学)
- 講師 篠原和子 (東京農工大学) 「時間のメタファーにおける視点」
- 講師 月本 洋 (東京電機大学) 「日本語と英語の『間主観性』の差に関する身体運動意味論的考察」
- 講師 楠見 孝 (京都大学) 「痛みのメタファーの主観性と間主観性」

発表要旨

〈研究発表〉第一室 (11月14日午後)

司会 太田 聡 (山口大学)

“Preposition Stranding and Phonological Phrasing in English”

内芝慎也 (無所属)

In this study, I argue that preposition stranding in English is a prosodic phenomenon. It is demonstrated that stranded prepositions are distributed in accordance with a conspiracy of the Lexical Category Condition (Truckenbrodt (1995, 1999[1])) and the Strict Layer Condition (Selkirk (1984[2], 1995)). The LCC prohibits the mapping of functional categories (e.g. prepositions) alone into prosodic constituents like phonological phrases, and the SLC dictates that prosodic parsing should be exhaustive. In terms of these two prosodic conditions, it is predicted that stranded prepositions must be contained in phonological phrases surrounding lexical categories: in other words, prepositions cannot strand alone in phonological phrases. The present study shows that this prediction is empirically borne out.

[1] “On the Relation between Syntactic Phrases and Phonological Phrases,” *LI* 30. [2] *Phonology and Syntax*, MIT Press.

「アルファベット頭文字語の音韻構造」

窪菌晴夫 (神戸大学)

本発表では、PC, PTA, NHK などのアルファベット頭文字語 (A 頭文字語) について、英語をはじめとする諸言語と日本語諸方言 (東京, 大阪, 鹿児島, 甕島他) のアクセント構造を比較しながら言語・方言間の異同を分析する。

英語の A 頭文字語は形態上は「語」としての緊密性を有しているものの、音韻的には black board (黒い板) のような「句」のアクセント構造を持つ。オランダ語などの他のゲルマン諸語も同様である。

これに対し日本語の A 頭文字語アクセン

トは、方言間で大きな差異が見られるものの、基本的に「句」ではなく「語」としての特性を示す。上記4方言を比較すると、A 頭文字語は複合名詞と同じアクセント構造を持つ (cf. Kubozono (2003[1])) という共通点が浮かび上がる。また日英語間の違いは、「英語より日本語の方が複合語音韻規則の適用範囲が広い」という知見 (窪菌 (1995[2])) と一致する。

[1] “Accent of Alphabetic Acronyms in Tokyo Japanese,” *A New Century of Phonology and Phonological Theory*, Kaitakusha. [2] 『語形成と音韻構造』, くろしお出版。

司会 内堀朝子 (日本大学)

“EPP as Selectional T-feature Satisfaction and Dative Subject Construction in Japanese”

嶋村貢志 (大阪大学大学院)

In this presentation I claim that dative subject constructions (DSC) in Japanese are not of the same kind as previous analyses, including Ura (2000[1]), argue them to be; dative subjects in Japanese do not necessarily assume such subjecthood as a feasible controller of PRO, an antecedent of the subject-oriented reflexive. Contrary to [1], I show that not only Subj but also Obj can take on such GFs. Thus my analysis is tantamount to rejection of DSC in Japanese. These facts can be swimmingly elucidated under my proposal, where dative subjects are just a realization of the self-sufficient arguments in the sense of Pesetsky and Torrego (2004[2]). Besides, I propose [2]’s (dual) TP system can also explicate the GF phenomena of (pseudo-)DSC in Japanese.

[1] *Checking Theory and Grammatical Functions in Universal Grammar*, OUP. [2] “Tense, Case, and the Nature of Syntactic Categories,” *The Syntax of Time*, ed. by Gueron and Lecarme, MIT Press.

「小節内の EPP 現象」

大澤聡子 (鈴鹿医療科学大学)

Chomsky (1981)によって提案された拡大投射原理 (EPP) は、極小主義理論では T の素性に起因すると仮定されている (Chomsky (1995, 2000))。しかし EPP の議論は常に、T が存在する主節か不定詞節で行われてきたため、EPP が T から独立した現象である可能性を検証できていない。したがって EPP と T の関連を明確にするには、T が関与しない環境で EPP 現象を観察する必要がある。ここではそのような環境として、T が存在しない小節を観察する。Felser (1999[1])等に基づき、小節の構造は機能範疇を含む FP とし、unaccusative や passive が述部の場合、主語が小節内で EPP 現象を示すことを論じる。このことは、小節内の EPP は T から独立した動機に起因する現象であり、T の素性である D 素性、格素性、 Φ 素性のいずれの素性の反映でもないことを示唆する。

[1] *Verbal Complement Clauses*, Benjamins.

“The EPP and Subject Extraction”

阿部 潤 (東北学院大学)

In this talk, I support the claim that the EPP is a PF interface condition by examining the interaction between the version of the EPP so conceived and subject extraction by A'-movement. In particular, I will show that given this conception of the EPP, so-called *that*-trace effects receive a natural explanation under the probe-goal system invented by [1] plus the linearization mechanism proposed by [2]. Given that the EPP feature of T must be satisfied by an overt element and further that such a feature checking can be done derivationally, I will demonstrate that the complementizer *that* blocks subject extraction due to the contradiction caused by the EPP satisfaction on the one hand and the order preservation condition proposed by [2] on the other. Finally, I will discuss those cases that evade *that*-trace effects in English and other languages.

[1] Chomsky (2008) “On Phases,” *Foundational Issues*, MIT Press. [2] Fox and Pesetsky (2005) “Cyclic Linearization of Syntactic Structure,” *Theoretical Linguistics*.

〈研究発表〉第二室 (11月14日午後)

司会 菊地 朗 (東北大学)

“Feature Inheritance and A/A' Properties of Non-DP Subjects”

北田伸一 (東北大学大学院)

本発表では、Chomsky (2008[1])の素性継承から生じる論理的可能性を提案する。Chomsky (2008)は、 C^0 には端素性と一致素性があると主張した。端素性は[Spec, CP]への A' 移動を引き起こす。一方、一致素性は C^0 から T^0 に素性継承され、[Spec, TP]への A 移動を引き起こす。

本発表では、 C^0 の端素性も T^0 に素性継承される場合があると提案する。これにより、 T^0 の端素性・一致素性と一致して[Spec, TP]に移動する要素は、A/A'要素の特性を示すと予測する。この予測が正しいことを、文主語と場所句前置、述部前置を用いて論証する。

[1] “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, MIT Press.

“Non-canonical Agreement:

Its Implications for Case/ ϕ -feature Checking”

水口 学 (長野工業高等専門学校)

This paper considers the mechanism of Agree and its implications for locality through the investigation of non-standard agreement in English. We claim that an uninterpretable Case feature is an independent probe in T (cf. [1]) and that there is a lexical parameter governing whether or not a Case feature constitutes a single probe with ϕ -features. It is demonstrated that the proposal can explain Case/agreement facts in the *wh*-construction and can tell non-standard agreement from standard agreement in a principled manner. The proposed analysis is shown to be further corroborated by the fact that it can also account for non-canonical verbal agreement in the Bantu inversion construction and parametric differences in the raising construction in Scandinavian languages. The paper has some consequences for the locality of Agreement, which we see are both theoretically and empirically

favorable.

[1] Carstens (2001). *Syntax* 4.

司会 塩原佳世乃 (文京学院大学)

「英語における分裂文の焦点移動分析 —統語構造地図の観点から—」

本多正敏 (神田外語大学)

従来の生成文法の枠組みでは、英語の分裂文は移動や束縛といった観点から主に分析されてきた (Chomsky (1977[1])など)。本発表では、そうした特徴に着目しつつ、Rizzi (1997[2])の統語構造地図 (Cartography) に基づく分析を提案し、分裂文における焦点構成素が焦点位置へ直接移動すると主張する。さらに、従来の研究ではあまり取り上げられることのなかった分裂文における *that* 節内部の特徴についても詳細に考察する。具体的には、*that* 節内で、①話題化等の統語操作が不可能であり、②倒置文が生起できず、③話者の認識に関わる助動詞や副詞表現が生起不可能であるという三つの問題に取り組む。そして、統語構造地図に基づく構造を仮定することにより、これらの問題が適切に対処されると主張する。最後に、研究発表の理論的帰結と統語・談話の接点について整理をしながら、今後の統語構造地図に基づく研究の方向性を提示する。

[1] “On Wh-Movement,” *Formal Syntax*, Academic Press. [2] “The Fine Structure of Left Periphery,” *Elements of Grammar*, Kluwer.

「助動詞選択と非対格性」

村田和久 (大阪大学大学院)

本発表では、オランダ語やイタリア語などで、非能格動詞文に着点指示句が生じた場合に、助動詞選択が特異なふるまいを示す事実を扱う。発表者はすでに着点指示前置詞句を動詞句同様に *p*-PP という分割構造に分析するべきだと主張している (着点指示でないものは *p* を欠くとする)。本発表はこれを発展させ、*p* という機能範疇が助動詞選択における特異なふるまいに寄与していると主張する。助動詞選択自体はあらゆる動詞に対して行われるものであり、着点指示句を伴うものはそ

のうちの一部分であるから、助動詞選択は「完了助動詞と動詞 (句)」との AGREE (Chomsky (2001[1])など) で実現するのが基本であると仮定すれば、*p* との AGREE まで含めるのはその意味でやはり特殊である。しかし、着点句の有無は助動詞選択に明らかに影響しており、*p* との AGREE を強く主張するものである。

[1] “Derivation by Phase.”

「相互表現の獲得について

—ミニマリスト・プログラムに基づく考察—

中戸照恵 (東京大学)

ミニマリスト・プログラム (Chomsky (1995, 2004, 2005 等)) では、言語能力を可能な限り言語外の認知体系とのインターフェイス条件の帰結として捉える試みがなされている。このプログラムのもとでは、子供は言語獲得の際に言語特有の知識として少なくとも以下の2つのことを定める必要があると考えられる。

- (1) 当該の語彙項目に含まれる素性[F]の種類
- (2) 素性[F]の値

本発表では、オランダ語、日本語等の相互表現の獲得について得られている知見から、言語間変異及び大人と子供の文法の差異を説明する際に(1)、(2)を仮定すると妥当な説明が得られることを論ずる。更に、子供の概念発達を経て段階的に素性値の指定が行われることを示唆する調査結果に基づき、素性の間には当該語彙項目に含まれる素性の種類を規定する階層関係があり、上位素性値の指定は比較的早く行われるが、下位素性値の指定は遅れることを論じる。

[1] Philip (2000) “Adult and Child Understanding of Simple Reciprocal Sentences,” *Lg* 76.

〈研究発表〉第三室 (11月14日午後)

司会 石川一久 (愛知学院大学)

「18世紀の小説における *be about to* の 発達について」

渡辺拓人 (大阪大学大学院)

拙論 (渡辺 (2009[1])) において、*be about to*

が近接未来用法に文法化したのは 19 世紀初頭の頃であると主張したが、本発表では、その直前の 18 世紀の小説 (*Eighteenth-Century Fiction*, Chadwyck-Healey) を調査し、be about to の急進的変化の理由を探る。

上記コレクションに収録の各作品を分析した結果、初期は女性作家に使用が集中しているが、その後性別に関係なく全体に広まるのが観察された。このことから、少なくとも小説というジャンルでは女性が文法化を牽引したこと、また変化が一部から全体へと拡大したことが分かる。これは Milroy (1992: ch. 6[2]) の述べる innovation から change という言語変化のパターンに当てはまり、be about to の文法化の進行にも社会言語学的要因が関わっていたと言える。さらに、18 世紀には文脈に依存する形で、潜在的な変化が徐々に進行していたことも示す (Traugott and Dasher (2002[3]))。

[1] 「近代英語期における be about to の発達と文法化」, *JELS* 26. [2] *Linguistic Variation and Change*, Blackwell. [3] *Regularity in Semantic Change*, CUP.

「英語史における属格の発達について」

茨木正志郎 (名古屋大学大学院)

本発表では、英語の名詞前位の属格について通時的観点から考察し、史的コーパスを用いた調査に基づいて、英語史における属格の統語位置の変化を明らかにする。’s の起源については、his 属格に由来するという見解 (Ohmura (1995)) と属格屈折の名残であるという見解 (Allen (1997)) があるが、後者を支持し、’s は格付与子として現代英語まで生き残ったと主張する。そして、Ibaraki (2009[1]) で提案された DP 構造と定性の認可に基づいて、史的コーパスの調査結果の分析と英語史における属格の統語位置と派生の変化を議論する。具体的には、古英語では属格は内在格であったが、次第に構造格に変化し、それに伴って属格屈折語尾であった(e)s が、格付与子として決定詞と同じ位置に生成されるようになったと主張する。これにより、古英語では属格名詞句が決定詞と共起することが可能であったが、現代英語ではそのような事例は

許されないという事実が正しく説明される。

[1] “The Development of the Determiner System in the History of English,” *EL* 26.

司会 水口志乃扶 (神戸大学)

“Floating Many in Japanese”

田中拓郎 (日本大学)

日本語の「多くの／たくさん」は直感的に同じ意味と解釈される。ところがこれらの量子子がいわゆる遊離数量詞の位置に生じた場合、意味に違いが生じる。「ジョンは本を{多く／たくさん} 読んだ」という文で、「多く」の場合、「読んだ本の冊数が多い」という意味になる。ところが「たくさん」の場合、前述の意味に加え「一冊の本を繰り返して読んだ」「一冊の本の大部分まで読み進んだ」という解釈も可能な、多義的な文となる。本論では、これらの意味の違いが生じる原因と、それぞれの意味の派生の過程について論じる。「日本語の量子子『多くの／たくさん』は英語の many とは違い、異なる語彙項目に分解されて解釈される」とする Tanaka (2006[1]) の知見を採用し、それが遊離数量詞となった時の構造と意味解釈の過程を提案する。遊離した「多くの／たくさん」の異なる解釈は、異なる語彙分解および異なる構造に起因することを示す。

[1] “Lexical Decomposition and Comparative Structures for Japanese Determiners,” *SALT* 16.

「Time-away 構文について」

西原俊明 (長崎大学)

英語には、They danced the night away. のような Time-away 構文が存在し、Jackendoff (1997[1]) をはじめとしていろいろな特徴が指摘されている。Time-away 構文は、NP と away の語順を入れ替えることが可能であり、一見すると、不変化詞構文 He looked the reference up. と同じような振り舞いを見せる。本発表は、不変化詞構文との相違点を明らかにするとともに、Time-away 構文の諸特徴を明らかにする。また、語順交替とそれに伴う異なる二つの解釈を統語構造、及び、意味合成を含む意味構造の写像という観点から論じる。意味合

成に関しては、中村 (2003[2])にそって論じることにする。

[1] “Twistin’ the Night Away,” *Lg.* [2] 『意味論』, 開拓社

「程度表現への動的アプローチ」

蔵藤健雄 (立命館大学)

本発表では、程度表現の真理条件を表すために動的意味論のアプローチが必要であることを次の①②に基づいて主張する。① *A is tall* のような文に対して、概略「Aの高さと文脈で与えられた基準値の間には差がある」という真理条件を与える。この基準値は指標表現ではなく[2], 存在量子子に束縛されていて、さらにこの存在量子子は動的束縛が可能であるという分析を提案する。これによって、比較表現を *A is tall, B is not tall* のように表す言語の比較構文をうまく表示できるようになる。② 「AがBより速く走るよりCはDより速く走る」のような構文では差が比較されている。ここで主節及びヨリ節を「Aの速さとBの速さには差がある」と表し、その上で、この存在量化された差が動的意味論でのみ可能な操作である存在解除[1]により消去され、その後、max 関数等通常の手続きで差が比較されるという分析を提案する。

[1] Dekker (1993) “Existential Disclosure,” *L&P* 16. [2] Kennedy (1997) *Projecting the Adjective*, Ph.D. diss., UCSC.

〈研究発表〉 第四室 (11月14日午後)

司会 武田修一 (静岡県立大学)

「Adnominal Conditionals の意味論・語用論的認可条件」

志澤 剛 (筑波大学大学院)

本発表の考察対象は、if-節が名詞を修飾する adnominal conditionals (以下 AC) である (e.g. *Think of the outcry if that had been a nuclear accident.*). AC に対し、唯一の先行研究である Lasersohn (1996[1]) の提示した分析は、文修飾の if-節との並行性を主張するものである。概略、定式 $\llbracket X \text{ if } S \rrbracket^{M,w} = \{x \in U \mid \text{for all those worlds } w' \text{ closest to } w \text{ such that there exists some } y$

$\in \llbracket S \rrbracket^{M,w}, \text{ it holds that } x \in \llbracket X \rrbracket^{M,w}\}$ における変数 X が S (文) であれば文修飾の if-節として、 N (名詞) であれば AC として統語上具現されるというものである。

本発表は、この分析の問題点を指摘した上で、次の2点を主張する。1) AC に修飾される名詞の指示対象は、意味論・語用論的に「条件の成立により発生する結果事物」、或いは「条件の成立によって結果状態が確定する事物」と解釈できるものでなければならない。2) AC における条件 P 、帰結名詞 Q に対する話者の意図・心的態度は、*Desirability* (赤塚 (1998[2])) の値が一致していなければならない。

[1] “Adnominal Conditionals,” *SALT* 6. [2] 「条件文と *Desirability* の仮説」, 中右 (編) 『モダリティと発話行為』.

「英語の右方転位構文・日本語の後置文と話し手の論理・聞き手の論理」

海寶康臣 (立命館大学)

本発表では、英語の右方転位構文 (Right Dislocation) と日本語の後置文に関して、Zipf (1949[1]) の最小労力の原則に基づいて、両構文は、(A) 転位要素・後置要素に先行する部分 (以下、先行部分と呼ぶ) に話し手の論理が働いているとみなすことが可能であり、(B) 転位要素・後置要素に聞き手の論理が働いているとみなすことができる場合のみ容認可能になる、という制約を提案する。(A) の条件は、先行部分の情報としての価値がゼロの場合や、同部分が話し手にとって儉約的でない場合には満たされず、(B) の条件は、転位要素・後置要素の情報としての価値がゼロの場合や、転位要素・後置要素を聞き手が聞いた時点で先行部分の解釈に修正を加える必要が生じる場合には満たされないことを示す。

[1] *Human Behavior and the Principle of Least Effort*, Addison-Wesley Press.

司会 藤井洋子 (日本女子大学)

「『A が A だ』構文に関する基礎的考察」

山本尚子 (奈良女子大学大学院)

英語名詞句トートロジー「A is A」は、日本

語の場合、「AはAだ」と「AがAだ」という2つの形式をとりうる。

(1) 夫：{a. 親は親/b. 親が親} だからな。

例えば、(1)で、息子の成績の悪さは親にも一因があるという妻の意見に対して、夫は、(1a)では、妻の意見に反対しているが、(1b)では、妻の意見に同意していると解釈することができる。したがって、英語ではともに、Parents are parents.という単一の形式で表され、区別することができない側面を日本語では「は」と「が」の違いによって区別し、異なる意味を伝達する手段を持っていると仮定することができる。

本発表では、山本 (2008[1])を参照しながら、同じく関連性理論を用い、「AがAだ」構文が、話者が抱く百科事典的知識から引き出される理想的な想定とは対立する想定を伝達するように構文を処理せよという手続き的情報をコード化していることを論じる。

[1] “Cognitive Aspects of Tautology,” *JELS* 25.

「英語と日本語の過去形の状態表現」

西山淳子 (立命館大学)

英語では現在形や現在完了形が好まれる文脈で、しばしば日本語では「た」が用いられる。(“It is/#was a holiday today.” vs. 「今日は休みだった。」 / “I’ve found it.” (“Here it is.”) vs. 「あった。」)

本稿では、第一に、過去形を現在完了形や現在形と意味論的に区別する基準を示し、主節の「た」が本当に過去形であることを明確にする。第二に、過去時制の状態文に注目し、上記の語法の違いは二つの相対立する推論、Q-implicature と I-implicature (Levinson (2001[1])) による解釈を前提とすることを示す。つまり、英語では Q-implicature、日本語では I-implicature が生ずることが、語法の違いとなっている。最後に、なぜ両言語で異なる推論が生ずるのか、scalar 分析 (Horn (1989[2])) を時制・アスペクト構造に応用し説明する。つまり、英語の過去と現在完了は scalar pair を形成するが、日本語ではこの pair が成立せず、Q-implicature が抑えられ、I-implicature がより出現し、語法の違いとなっ

たことを示す。

[1] *Presumptive Meanings*. [2] *A Natural History of Negation*.

“Investment of Meaning in Discourse: Intertextuality through Resonance”

高梨博子 (日本女子大学)

This study demonstrates how meaning gets shaped through multiple layers of texts. Going beyond the traditional semantic and pragmatic accounts, meaning here is regarded as the product of, as well as the investing entity of, intertextuality between culturally meaningful contexts of the past, the present, and the future. Such intertextuality of meaning is sustained by “resonance” ([1]), the recycling of accessible resources, which is often represented in the linguistic forms on the various levels. In addition to the functions of recontextualization ([2]) and differentiation, resonance also has the function of enhancing the situated meaning. In our English discourse data of an American TV drama series, the use of resonance was found to facilitate in the creation of invested meaning, many cases of which are particularly used for generating humor.

[1] Du Bois (2007) “The Stance Triangle,” *Stancetaking in Discourse*, ed. by Englebretson, Benjamins. [2] Tannen (1989) *Talking Voices*, CUP.

〈研究発表〉第五室 (11月15日午前)

司会 中谷健太郎 (甲南大学)

「非下位範疇化場所格目的語の意味機能について」

吉川裕介 (佛教大学)

英語には、目的語位置に場所を示す名詞句 (locative object; LO) が生起する構文がある。(1a)は、本来的に自動詞であるはずの動詞 swim が LO を伴い、「海峡を泳ぎ切る」という「偉業 (feat)」が叙述される。(1b)では、他動詞 spread が LO を伴い、「パン一面にバターを塗る」と、その場所全体が内容物で覆われる意味で解釈される。

(1) a. Alex swam *the channel*.

b. John spread *the bread* with butter.

本発表の主眼は、(1)に生起するLOがどのような意味機能を果たしているのかを明らかにするところにある。具体的には、(1)の構文に観察される語彙の総和からは算出されない意味 (*feat* や *full* など) がなぜ生じるのかを、幾つかの統語テストや大規模コーパス、実例などを基に実証的に明らかにする。

[1] Schlesinger (1995) “On the Semantics of the Object.” [2] Iwata (2008) *Locative Alternations: A Lexical Constructional Approach*.

「接触・打撃動詞の心理述語用法について」

板東美智子 (滋賀大学)

接触や打撃といった物理的活動 (physical action) をあらわす動詞が、非動作主を主語に、経験者 (あるいは、経験者の心情を表す名詞句) を目的語にとると心理的狀態変化 (change of mental state) を表す動詞になる。本発表では、英語と日本語の接触・打撃動詞の意味的特徴と、それらの動詞と共起する名詞句の意味的特徴を Generative Lexicon (Pustejovsky (1995[1])), および、生成語彙意味論 (小野 (2005[2])) で提唱されている特質構造を用いて記述し、特に、主語名詞句がタイプ強制を受けて出来事名詞として解釈されるとき、連動して接触・打撃動詞とその補部の名詞句が心理的狀態変化を表す動詞句として転換することを主張し、そのプロセスを明らかにする。

[1] *The Generative Lexicon*, MIT Press. [2] 『生成語彙意味論』, くろしお出版。

司会 木口寛久 (宮城学院女子大学)

“SPEC-T in Passive Constructions”

本田隆裕 (大阪大学大学院)

Mihara and Hiraiwa (2006[1]) suggest that idiom chunks in Japanese cannot be passivized, although there exist several VP idioms whose objects can be passivized in English. However, if a *wh*-phrase or a *niyotte*-phrase, which corresponds to a *by*-phrase in English, is scrambled to the sentence-initial position, idiom chunks can be passivized. The aims of this presentation are to

explain why idiom chunks in Japanese usually cannot be passivized and to prove that *niyotte*-phrases can be raised to SPEC-T, adopting Matsuoka’s (2003[2]) analysis. Miyagawa (2005[3]) proposes that Japanese is a focus prominent language where what agrees with the focus feature is raised to SPEC-T. I claim that *wh*-phrases and *niyotte*-phrases can agree with the focus feature while idiom chunks cannot. I propose that what is impossible is not passivization of idiom chunks but raising them to SPEC-T.

[1] 『新日本語の統語構造』, 松柏社. [2] “Two Types of Ditransitive Constructions in Japanese,” *JEAL* 12. [3] “On the EPP,” *MIT Working Papers in Linguistics* 49.

“On the Asymmetry in Passives between Japanese and Korean”

青柳 宏 (南山大学)

In this talk, I will focus on the presence and absence of so-called adversity passives in Japanese and Korean, respectively. According to [1] and [2], languages diverge in the availability of high and low applicatives, and while the semantic import of low applicative is “transfer of possession,” that of high applicative is “affectedness” (e.g. benefactive, malefactive, etc.). I will argue that while Japanese are endowed with both, Korean employs only low applicative; hence, the latter lacks “affected” (i.e. adversity) passives. This is evidenced by the richness in the inventory of high applied verbs (i.e. the auxiliary use of verbs of giving and receiving) in Japanese and its relative paucity in Korean. Furthermore, the proposed analysis has a revealing implication as to the morpho-syntax of voice alternations in the two languages.

[1] McGinnis (2001) “Variation in the Phrase Structure of Applicatives,” *Linguistic Variation Yearbook* 1. [2] Pyllkkänen (2008) *Introducing Arguments*, MIT Press.

〈研究発表〉 第六室 (11月15日午前)

司会 奥 聡 (北海道大学)

“Visible Scope Economy in Comparison”

川原功司 (University of York 大学院)

The purpose of this paper is to discuss the mapping between syntax and semantics with a specific focus on phrasal comparatives in Japanese, demonstrating that movement of scopal elements is constrained by a requirement from semantics and thus syntax is not completely autonomous. I show that a comparative constituent introduced by *yorimo* must overtly precede its host gradable expression, a consequence of obligatory QR a la Bhatt and Takahashi (to appear[1]) and then show that a comparative constituent cannot move beyond negative scope composed by NPIs. I argue that movement in Japanese is freely done as long as it does not impose a burden at LF. Movement of scopal elements is possible if it is compatible with an appropriate semantic representation, but it is not if it requires an ‘extra’-reconstruction at LF.

[1] “Reduced and Unreduced Phrasal Comparatives,” *NLLT*.

「LF コピーと PF 削除による省略文の分析」

島 越郎 (東北大学)

生成文法では、意味解釈部門 (LF) のコピー、または、音声解釈部門 (PF) の削除に基づく省略文の分析が仮定されている (Sag (1976[1]), Williams (1977[2])). 本発表では、Chomsky (2001[3])によるフェーズ理論の下、これらの操作を誘発する素性がフェーズである CP と vP の主要部 (C と v) に随意的に基底生成され、次の特性を持つと提案する。

(1) a. Copy 素性 (C-F) を持つ主要部の補部と指定部には、空所と音形を持つ要素がそれぞれ選択され、LF で空所に先行詞がコピーされる。

b. Deletion 素性 (D-F) を持つ主要部の最大投射は PF で削除される。

この提案は、間接疑問縮約を C の C-F、動詞句削除を v の D-F、擬似空所化と空所化を v の C-F によりそれぞれ派生し、これらの省略文が示す特徴を統一的に説明する。

[1] *Deletion and Logical Form*. [2] “Discourse and Logical Form.” [3] “Derivation by Phase.”

司会 廣瀬幸生 (筑波大学)

「WH 感嘆句の派生と機能」

福田 稔 (宮崎公立大学)

近年、CP の Left Periphery に関する Rizzi (1997[1])の分析を DP に適用して、DP に Focus Phrase (FocP)があるという提案と事例の検証が行われている (Aboh (2004[2])や Haegeman (2004[3])など)。本発表では、Gungbe 語に関する Aboh の分析を英語の WH 感嘆句に応用して、DP 内部で FocP への移動が生じ ([*how pretty*₁ [*a t₁ girl*]]), さらにこれが節の FocP の指定部へ移動すると論じる ([*How pretty* [*a t girl*]]₂ *she is t₂*!). これにより、①WH 感嘆句の *how* と *what* は相補分布を成すという事実、②言語習得における DP と WH 感嘆句の使用時期と習得順序に関する事実を説明する。また、③WH 感嘆句の前置詞随伴は、一般に主節では許されないが補文では許されるという事実と、主節でも許される場合があるという事実を焦点移動と機能的側面から説明する。

[1] “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar*, Kluwer. [2] “Topic and Focus within D,” *Linguistics in the Netherlands 2004*. [3] “DP-Periphery and Clausal Periphery,” *Peripheries*, Springer.

「問題解決談話における 日・英語話者の視線について」

片岡邦好 (愛知大学)

従来の談話研究で詳細に扱われてこなかった対象に、視線と発話の因果関係の問題がある。本発表では、問題解決型タスク中に出現した参加者による視線の質的分析を通じて、発話連鎖のタイプに通底する視線の一般的機能と特徴を考察する。そのために、「ミスター O コーパス」中の日・英語母語話者の視線使用の実態に焦点を当て、「視線」が果たす (1) 談話やナラティブという大きな単位の内的構造の指標機能、(2) 統語的・連辞的・慣用的構文における境界の投射機能、(3) 語、句、文の意味・内容的な刺激への応答／モニタリング機能、(4) 強調、感情表出、評価的スタンスの表明といった表出機能、(5) 他の身体的モダリティとの協調作用という5つの側面

から言語間の共通特性を探る。これにもとづき、視線配布という非言語行動が、言語的／パラ言語的情報伝達の促進に大きく寄与することを確認し、従来の単一機能的分析は不十分である点を指摘する。

〈研究発表〉第七室 (11月15日午前)

司会 滝沢直宏 (名古屋大学)

「指示表現の選択と情意： 英語会話データにおいて」

成岡恵子 (東洋大学)

本研究は英語の会話において話者が指示表現を選択する際 (referential-form choice) の要因の一つに話者の情意があることを示す。指示表現選択に関する先行研究では (1) 談話構造, (2) 話題の連続性, (3) 会話参加者の認知状況から説明するものが多いが、会話データを用い特に指示詞 (this, that, these, those) を含む表現に注目した分析から、指示表現選択には話者の感情や態度も関わることを明らかにする。また一続きの談話の中で同一対象が代名詞 (he) や異なる指示詞 (this guy, that guy) など複数の表現で言い表されている例からはインターアクションの中でコンテキストが変化し、現実の場面や想像の場面といったフレームが変わる (cf. Enfield (2003), Hanks (1996), Stivers (2007)) ことにより強い情意が表現されていることを示す。

「なぜ I sat in the bath tub, soaping a meditative foot. は転移修飾表現として 解釈できるのか」

金澤俊吾 (岩手県立大学)

英語における転位修飾表現 (以下 TE) を含む文である (1) He was now smoking a sad cigarette. と, (2) As I sat in the bath tub, soaping a meditative foot. は、単一の分布を成すという前提の基で分析されてきた (Hall (1973[1])). しかし, (1)の動詞には、目的語名詞と、意味的に最も結びつきの強い動作が具現化されるのに対し, (2)には、そのような関係はみられない。「動詞とその目的語」という形式的な関係のみがみられる。なぜ, (2)は、TE を含む文

として解釈できるのだろうか。

本発表では、TE を構成する[A-N]内の N の特質構造 (qualia structure) に注目し、TE を形成する際、N の特質構造内の情報が、共起する要素の分布を決定づけると主張する (Pustejovsky (1995[2])). そして, (1)は、N の特質構造内の情報に基づいて形成されているのに対し, (2)は、文脈から、新たな動作のフレーム意味に含まれる情報が、N の特質構造に補完されて形成されていると提案する。

[1] “The Transferred Epithet,” LI 4. [2] *The Generative Lexicon*, MIT Press.

司会 鍋島弘治朗 (関西大学)

「英語の到達経路表現における前置詞の プロフィール」

清水康樹 (東北大学大学院)

本発表では、There is a tower through the forest. における through のように、到達経路表現に伴う前置詞を扱う。この種の文は、前置詞句の前に a mile のような距離表現または an hour のような時間表現が付加されると、中間地点や持続時間を表す。松本 (1997[1])によれば、この用法の from は時間表現を必要とする。深田・仲本 (2008[2])によれば、この用法の across は心的スキヤニングによる経路の着点をプロフィールする。

解決すべき問題として、この種の文に伴う前置詞に関して距離／時間表現の付加の観点から十分に特徴付けがされておらず、心的スキヤニングの観点からそれらの前置詞のプロファイルが十分に提案されていないという 2 点がある。ここでは、到達経路表現を作る際に距離／時間表現を必要とする前置詞を特定し、この用法での前置詞のプロファイルでは前置詞と距離／時間表現の意味が両立した心的スキヤニングがなければならぬと主張する。

[1] 「移動表現の拡張：主観的移動表現」、『空間と移動の表現』, 研究社. [2] 『概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ—』, 研究社.

「There-アマルガムのサブタイプと それぞれの意味・機能」

高木 勇 (京都大学大学院)

本稿では Lambrecht (1988[1])等で議論されている There-アマルガム (e.g. *There was a farmer had a dog.*) の意味・機能の再検討を行う。Lambrecht らは、当該構文の動機付けを「情報構造の修正」とし、例えば新情報で始まる *A farmer had a dog.* という文は情報構造上「好ましくない」ため、情報の流れを修正する(「旧→新」という流れを作り出す)ために、文頭に *There was* が付加されると分析している。しかしながら、実際には *There's they got there.* (BNC)のように、Lambrecht らの仮説では説明できない反例も存在する。このことを出発点とし、単文から、当該構文が使用されたコンテキストへと分析の幅を広げ、「情報構造の修正」以外の動機付けへ迫ることを試みた。本稿では「Run-on」型、「EVENT-Subject」型、「Particle」型のサブタイプを仮定し、それぞれの意味・機能を「コンパクト性」、「新情報としての節の導入」、「聞き手の注意の喚起」とする。

[1] “There Was a Farmer Had a Dog: Syntactic Amalgams Revisited,” *BLS* 14. [2] Prince (1981) “Toward a Taxonomy of Given-new Information,” *Radical Pragmatics*, ed. by Cole, Academic Press.

〈研究発表〉 第八室 (11月15日午前)

司会 有村兼彬 (甲南大学)

“How to Move Syntactic Objects Bigger than a Phase: On the Formal Nature of Transfer and Phasal RE-Assembly”

小畑美貴 (University of Michigan 大学院)

This presentation aims to reveal and address the following new question: How can syntactic objects larger than a phase possibly undergo movement given the application of Phase-head complement Transfer? Here I explain how to move a phrase bigger than a phase (vP and CP) within the phase-based derivational approach advanced in Chomsky (2008[1]). I propose that (i)

a copy of only the label is left behind in the narrow syntax after Transfer (i.e. “label copy”) – rendering internal structure unrepresented and unavailable to the narrow syntax (cf. Riemsdijk and Williams (1981[2])) – and (ii) based on those label copies (essentially “traces” of earlier work) syntactic objects whose features are already transferred can be re-inserted into the final pronunciation sites at the SMS/AP interface (i.e. phasal re-assembly). Also, I demonstrate that those mechanisms are derivable from natural interface conditions.

[1] “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, MIT Press. [2] “NP Structure,” *The Linguistic Review*.

“The Semipermeable Membrane Theory in Syntax” (E)

Hideki Maki (Gifu University)
and Kenichi Goto (Gifu University)

There are some cases that show asymmetries in terms of barrierhood for movement and agreement ([1, 2]), such as those in which movement across a barrier is impossible, while agreement across the same barrier is possible. These cases show that there is no absolute barrier both for movement and agreement. However, the issue has been overlooked as to why a barrier is for movement, not for agreement. In this paper, we provide an adequate solution to this issue by proposing a theory partially relying on a device from biology. To be more precise, we propose a semipermeable membrane theory of syntax, under which an absolute “barrier” is like a semipermeable membrane ([3]), and has fine holes in it, so that it constitutes a barrier for an entity which cannot go through the holes, but not for an entity which can.

[1] Chomsky (1986) *Barriers*. [2] Chomsky (2001) “Derivation by Phase.” [3] Commack et al. (eds.) (2006) *Oxford Dictionary of Biochemistry and Molecular Biology*.

司会 岸本秀樹 (神戸大学)

「謙讓化と介在効果」

中村太一（東北大学大学院）

本発表では、日本語の3項動詞の謙讓化を取り上げる。この謙讓化において、間接目的語がwh語である時、Harada (1976[1])の一般化に反し、直接目的語が動詞の謙讓化を認可できると指摘する。この場合、wh語である間接目的語の非顕在的移動がAgree操作に見られる介在効果を解消していると主張する。さらに、Chomsky (2008[2])で議論されるphase単位での操作の同時適用について、この事実が持つ示唆についても議論する。また、当該の事実に関して見られる個人差がIcelandicのDative Nominative構文にも同様に見られる事実を指摘し、これら個人差を説明する可能性を探る。これに加え、謙讓化において、間接目的語の顕在的移動が介在効果を解消するのか考察する。本発表は、Agreeによる謙讓化の分析に基づくため、Boeckx and Niinuma (2004[3])やNiinuma (2003[4])を支持するものである。

[1] “Honorifics,” *Syntax and Semantics* 5. [2] “On Phases.” [3] “Conditions on Agreement in Japanese,” *NLLT* 22. [4] *The Syntax of Honorification*, Ph.D. diss., UConn.

「統語一形態の相互関係と形態的制約」

森田順也（金城学院大学）

動詞由来複雑語の補部構造が基体動詞のそれいどのように対応するかの研究がなされてきた。例えばcreateの直接目的語は対応する派生語に継承される（they re-created a folk tale/creation of a folk tale）。本発表は、形態機構の仕組み及び統語機構との相互関係の解明を目的として、接辞付加に伴う基体の補部の継承に着目し、そのメカニズムを明らかにするものである。第1節では理論全体における継承条件の位置づけを行う。第2節では、先行研究（Carlson & Roeper (1980[1])など）のポイント及び問題点を述べた後、関連する形態制約を提案する。具体的には、「形態規則の出力は、その基体の補部のうち第一姉妹の補部（名詞句補部）のみを継承できる」という継承制約を提案する。第3節では、同制約の反例とその対処法を述べる。即ち問題の反例を、制約

が特定の状況で緩められて変則形が生み出されるという構図（cf. Morita (2003[2])）の中に位置づけられる、補部の拡張として捉える。

[1] “Morphology and Subcategorization.” [2] “Mixture of Morphological and Syntactic Elements,” *Empirical and Theoretical Investigations into Language*, ed. by Chiba.

〈シンポジウムA室〉（11月15日午後）

Experimental Syntax: What We Can Expect, and What We Cannot (E)

Chair: Hiromu Sakai (Hiroshima University)

As a branch of natural science exploring into the nature of human language faculty, any linguistic research has to be ‘experimental’ in a broad sense (Marantz (2005[1])). At the same time, the research using ‘experimental’ methodology in a narrow sense (reading time, eye-tracking, ERP, fMRI, etc.) has yet to provide any explanatory theory of computation conducted in the brain (Poeppel & Embick (2005[2])). Then, it is legitimate to ask what we can expect and what we cannot from experimental methodology. This symposium aims at answering these questions from experimental as well as theoretical or evolutionary point of view.

[1] “Generative Linguistics within the Cognitive Neuroscience of Language,” *The Linguistic Review* 22. [2] “Defining the Relation between Linguistics and Neuroscience,” *Twenty-First Century Psycholinguistics*.

“Real-time Syntactic Computation”

Lecturer: Colin Phillips
(University of Maryland)

Nowadays one can use a variety of experimental tools (reading time, eye-tracking, ERP, fMRI, etc.) to understand the detailed time-course and neural circuitry of syntactic computation in the mind/brain, and much has been learned from such studies. This makes it possible to develop more realistic models of syntactic computation than those that are standardly pursued. In this talk I will review a number of findings on

how basic grammatical processes are mentally implemented, with a focus on the role of timing in predicting the grammatical accuracy of the on-line comprehension system.

“Experimental Syntax: What We Can Expect”

Lecturer: Masatoshi Koizumi
(Tohoku University)

The human language faculty can be analyzed and understood at several different levels of abstraction. It has been studied at the theory of computation level in linguistics, and at the algorithm level in psychology. Language has also been studied at the level of implementation in physiology. Experimental syntax constitutes an important testing ground for the evaluation of competing linguistic hypotheses at the theory of computation level to the extent that the nature of language is understood at the algorithm and implementation levels, as experimental data are interpreted under certain assumptions obtained from studies at the latter two levels (Stockall and Marantz (2006[1])). It is thus essential for researchers in the different disciplines to share their findings, to relate them to one another, and more ideally, to integrate the fields into a unified approach to elucidate how the brain enables language (Phillips (2004[2])).

[1] “A Single Route, Full Decomposition Model of Morphological Complexity,” *The Mental Lexicon* 1. [2] “Linguistics and Linking Problems,” *Developmental Language Disorders*, Lawrence Erlbaum.

“What We Cannot Expect from Experimental Syntax”

Lecturer: Hiromu Sakai (Hiroshima University)

Psycholinguistic researches on human sentence processing in the past 20 years provided convincing evidence for incremental construction of syntactic representation. Given the leading idea of minimalist program that syntax is the only cognitive mechanism for building syntactic representation, real-time sentence comprehension or production has to involve syntactic computation.

At the same time, data from psycholinguistic experiments usually contain factors beyond syntactic computation. Experimental data thus tell us nothing about the nature of syntactic computation unless we carefully control such factors. Examples of Japanese sentence processing are presented in order to illustrate this point.

“Experimental Syntax for Bilingualism?”

Lecturer: Koji Fujita (Kyoto University)

While experimental syntax should constitute a powerful research method for the studies of language evolution in bilingualism, their findings sometimes do not fall in place in light of theoretical modeling of human syntax. If, for example, syntactic computation consists solely of binary Merge and its recursive application, with other properties largely following from the “third factor” (Chomsky (2005[1]) and elsewhere), it is a natural (but as yet unfulfilled) expectation that we can experimentally sort out core syntactic phenomena that are amenable to the working of this elementary machinery and will therefore offer a deep insight into the origin(s) of syntax. This and other issues pertaining to the overall architecture of human language and cognition, including modularity and domain-specificity (Marcus (2006[2])), will be briefly discussed in the hope of bringing experimental and evolutionary studies into closer contact with each other.

[1] “Three Factors in Language Design,” *LI* 36.

[2] “Cognitive Architecture and Descent with Modification,” *Cognition* 101.

〈シンポジウムB室〉(11月15日午後)

これからのコロケーション研究

司会 堀 正広 (熊本学園大学)

コロケーション研究は、現在では英語研究の重要な研究領域の一つとなっている。現代英語のコロケーション研究だけでなく、コロケーションの理論面の研究、英語史におけるコロケーション研究、英語教育の中でのコロケーション教育の研究、文体としての作家のコロケーション研究、辞書におけるコロケー

ションの記述に関する研究等、コロケーションは様々な領域と関わりがある。最近では、国内でも英語関係の雑誌や学会において、コロケーションについてこれまで以上に言及されるようになってきている。このような状況を踏まえて、本シンポジウムは、これまでのコロケーション研究の成果を概観し、英語史・英語教育・文体・辞書におけるコロケーション研究の諸問題を指摘し、新しい研究の可能性を探り、コロケーション研究への関心を喚起することを目的としている。

[1] 堀正広 (2009)『英語コロケーション研究入門』, 研究社

「これからのコロケーション研究」

講師 堀 正広 (熊本学園大学)

本発表は、3つのパートにわかれる。第1部は、コロケーションは、音声や語彙や文法の問題と同じように、さまざまな問題と関わりがあることを明らかにする。第2部は、ロンドン学派のJ. R. Firthが1950年代にコロケーション研究の必要性を唱えて以降のコロケーション研究の状況を、国外と国内に分けて概観し、国内においては、本格的なコロケーション研究は始まったばかりであることを述べる。第3部は、これまでのコロケーション研究を踏まえながら、英語史、辞書、文体、英語教育などの各領域において、どのような点においてコロケーション研究の可能性があるかを提言する。各領域におけるさらに詳しい研究の可能性については、他の講師の発表において論じられる。

「英語史とコロケーション研究」

講師 渡辺秀樹 (大阪大学)

本発表では「コロケーション」をイディオム・諺・直喩ととらえ、英語動物名の人間比喩用法をテーマに、動物名同士の類義と対義の系列構造の存在を示す。そして諺的直喩における形容詞と動物名の連語の歴史的变化の過程を考察し、連語のペア構成、及び標準使用への定着には、意味と音韻動機の双方が強く関わることを論じる。考察対象は“as dead as a dodo”とその祖形の“as dead as a doornail”, 議論においては細かい数値統計は示さず、文学

者の特定使用例と単語の意味変化の点に注目する。

「コロケーションと辞書—英和辞典を例に」

講師 赤野一郎 (京都外国語大学)

辞書に盛り込むべき情報は、語の正確な理解のための受信型情報と、語の適切な使用のための発信型情報に分けることができる。英英辞典および英和辞典の最近の傾向の1つは、後者の情報提供に力を注いでいる点である。従来から行われているレジスターを示すラベル付与、動詞や形容詞の構文表示・選択制限の記載、名詞におけるU/Cの区別などは、場面に応じて語を適切に選択し、文法情報に基づき語を適切に使用するための発信型情報である。新しい試みとしては、勝俣 (1958[1])を別にすれば、語が有する他の語との慣習的結合傾向、すなわちコロケーションに関する情報の強化をあげることができる。

本発表では、英英辞典と英和辞典の記述を精査することにより、コロケーションに関する辞書記述の内容がどのように変化してきたかを検証した後、コーパス言語学の言語観に基づき、英和辞典におけるコロケーション情報の効果的な提示方法を探る。

[1]『英和活用大辞典』.[2] 井上・赤野『ウィズダム英和辞典』.

「文体意匠としてのコロケーション—Dickensにおけるgentleman—」

講師 田畑智司 (大阪大学)

Dickensの英語の面白さの一端はそのコロケーションにあると言える。Dickensは、しばしば、意匠を凝らしたコロケーションによって、ユーモアやアイロニーを醸し出したり、巧みに人物や事物を風刺し読者を惹き付ける。Dickensの作品におけるキーワードgentlemanはまさにそのような例に富む。そこで、本発表では、Dickensの作品24点および18-19世紀の代表的作家の作品54点からなるコーパスにおけるgentlemanのコロケーションを調査する。まず、相互情報量によりgentlemanとの結びつきが強いと判定された共起語の共起統計量データを対応分析によって縮約し、gentlemanの共起語と個々のテキストや時代

区分等との相互関係を視覚化することでコロケーションの特徴を俯瞰的に捉える。そして、計量分析の結果と、コンコーダンスラインの質的な読みを組み合わせ、いかにコロケーションが文体意匠として機能しているかを論じる。

「コロケーションと英語教育」

講師 小屋多恵子 (法政大学)

本発表は、英語教育分野におけるコロケーション研究の現状を紹介し、教育現場での様々な問題点を指摘することを目的とする。1980年以降、コロケーション指導の重要性を唱える研究者が多くなるにつれて、世界的にはEFL (外国語としての英語)、ESL (第二言語としての英語) の学習者を対象とするコロケーション習得のメカニズムを解明する実証研究が多く報告されている。一方で、日本ではこの10年間でコロケーションが重要な研究領域の一つになっているものの、習得に関する研究は未だに数が少ない。さらに、その研究成果は、中学校・高等学校の英語教育現場に反映されておらず、学習指導要領、教科書、教師・学習者のコロケーションに対する意識、指導法に様々な問題点が見られる。このような日本の研究・教育の現状を踏まえ、今後どのような実証研究を行っていけばよいか、効果的なコロケーション指導には何が必要かを最後に提案する。

(シンポジウムC室) (11月15日午後)

言語を通してみるインターアクションと文化の同一性—日英相互行為比較—

司会 井上逸兵 (慶應義塾大学)

生物学が源とされる同一性の概念は、言語研究においてはもっぱら言語と文化との関係をめぐる論考に用いられてきた。特に日本語と英語との比較において、主語や主観性の表れ、数の概念、「する」と「なる」(池上 (1981)) 的な指向性の異なりなど、多くの知見を生み出してきた。しかしながら、相互行為、もしくは相互行為に埋め込まれた言語と文化との同一性については、まだ十分な議論がなされているとは言い難い。本シンポジウムでは、

いくつかの観点から、日英語などを用いた相互行為を材料としてこの同一性を論ずる。相互行為やコミュニケーションを言語学が語る時、往々にして運用やパロール的なもの、あるいは言語学の応用形として扱われがちだ。しかし、本シンポジウムの目指すところは、むしろ運用やパロールにこそ言語の本質が潜んでいる、という言語学の解体作業である。むしろ問われるのは解体した後何をも再構築できるかであろう。

「コンテキスト化の資源と相互行為の型」

講師 井上逸兵 (慶應義塾大学)

言語を介した相互行為と文化との同一性を、メッセージ (内容) と形式との相互作用、さらにはそれを資源とした相互行為という視点から考えてみたい。「相互行為」も「相互作用」も共にインターアクション (interaction) の訳語だが、この二重性に着眼し、日英両言語それぞれに内在化したインターアクション性と文化的な型を論じてみよう。言語の形式的側面、例えば言語コードの選択、定式表現、繰り返し、呼称、レジスター、身体性などは、しばしばコンテキスト化 (Gumperz (1982)) の資源となるが、これがメッセージレベルの言語使用と複層的に関わりを持つ様を見てみたい。それぞれの言語は固有のコンテキスト化、コミュニケーションの資源をもち、これ自体が言語形式に深く関与する。さらにそれは対人的な関係を構築し、文化固有の好まれる談話の型を生み出すことに寄与する。それは日英語による相互行為の対訳によって、より有意義に提示できることも示したい。

「助言談話の日米比較研究」

講師 阿部圭子 (共立女子大学)

本発表は日米助言談話における説得ストラテジーの言語的特徴を異文化比較の視点に立って考察し、これまでの欧米理論偏重の語用論の原理やモデルを再考し、分析手法における新しい枠組みを発見することを目指している。

今回は、助言談話全体の sequence に注目し、助言談話を構成する5つのセグメント、すなわち 1. 悩みの提示、2. 現状の把握、3. 問題

所在の明確化, 4. 助言の提示, 5. 謝辞, の談話の流れにおける出現頻度や出現パターンを分析する。さらに, それらの結果と助言の成功, 不成功との関わりを日米で比較し, 考察する。

尚, データはアメリカと日本で放送されたラジオの「人生相談」番組を録音し, 文字化したものを使用した。

「インタラクション行動の文化パラメータ —解放的語用論の試み—」

講師 片桐恭弘 (公立はこだて未来大学)

People use language in their daily interactions not only for exchanging information on facts relevant to some aspects of their lives, but also for negotiating consensus to regulate their social lives. Exact actions people take in interactions are regulated not only by their respective goals but also by cultural norms and customs specific to each social group. Based on a comparative study of dialogue interactions in Japanese, English and Arabic, different interaction styles are identified across three languages in terms of such moves in dialogue as how story fragment proposals are produced, how proposals are responded, and how initiatives are controlled. A theoretical generalization is then attempted in the form of a parametric conception of dialogue interaction behaviors to capture the possible space of variations in interaction styles within different language communities.

「認識論から存在論の言語学へ： 場の言語学への招待」

講師 井出祥子 (日本女子大学)

英語は「する」言語・日本語は「なる」言語などの諸現象を文化との関わりで論じることの意義は大きい。しかし, 言語比較から文化を明らかにする研究の抜本的発展には, いわゆる文法・談話現象を比較するに留まらず, それぞれの言語話者が言語をどう捉えているかについての異なりに目を向ける必要がある。本論では, 英語は認識論の立場から見ている言語であり, 主として西欧語研究をモデルとして研究してきた日本語もその枠で見て

きた嫌いがある。日本語の本来の姿に自然な見方のためには, 認識論だけではなく, 存在論の立場でも見なければならぬ。ここでいう認識論とは, 大脳新皮質で司られる認識という働きで捉えられるものであり, 存在論とは, 海馬をはじめ大脳旧皮質において直感や感情で捉えることをも含めた働きによるものである。日本語の発話が命題だけでは文が成り立たず, モダリティを必要とすることは, 存在論の例証である。存在論で言語現象を捉えるとき, 「場の理論」が有効な理論的枠組となる。

〈シンポジウムD室〉(11月15日午後)

Old Problems with New Insights

—日本語母語話者の英語習得に見られる マッピングの問題について

司会 中山峰治 (The Ohio State University)

第二言語習得理論において「インターフェイス」という言葉が聞かれて久しいが, 言語習得において見られる誤りには, 音声・音韻・形態・統語・意味論等にまたがった問題が多い。事実, モジュール理論に基づいた研究が進んで来ると, 単一の理論内だけでは(例えば, 統語論だけで)説明のむずかしい誤りが見えてくる。このシンポジウムでは, 日本語母語話者英語学習者の習得過程においてよく見られる誤りを, 最近の研究成果に基づき音声・音韻・形態・統語・意味概念のインターフェイスにおけるマッピングの問題として捉え直し, それらの原因を言語理論の視点から調査する。具体的には, 語中音挿入, 動詞の屈折形態素, 名詞の複数形等, 日本人の英語によく見られる誤りについてマッピング上の問題として捉えることができることを示し, 第二言語習得の本質を解明する一助として, 日本語の干渉, 転移を含め, なぜそのような誤りが生じるのかを考える。

「はじめに

〈概論—Old Problems with New Insights〉

講師 中山峰治 (The Ohio State University)

L2 習得過程において見られる誤りには, 音声・音韻・形態・統語・意味論等のそれぞれ

にまたがった問題、インターフェイスの問題が多いことがわかってきた。例えば日本語母語話者の L2 英語において冠詞、名詞の複数形、動詞の屈折素性、不変化詞の位置等の習得が遅く、多くの誤りが報告されている(白畑・若林・須田 (2004[1]), Yoshimura & Nakayama (2009[2])). その誤りの中には、学習者がどのレベルのインターフェイスにおいてどのようなマッピングの問題として生じるのかを捉え直すことにより、その原因が説明可能になるものがあることが分かった。この点に関して留意すべき事実の一つとして、L1 の影響が正か負によって誤りの頻度と量が異なることが挙げられる。この概論では、最近の第二言語習得研究の成果を踏まえ、母語の干渉、転移、役割等について、各講師の発表に関連した理論的及び実証的な背景に触れる。

[1] 『英語習得の常識非常識』, 大修館. [2] “Nominative Case Marking and Verb Inflection in L2 Grammar: Evidence from Japanese College Students’ Compositions,” *Proceedings of the 10th TCP*, Hituzi.

“Mapping Segments to Prosody as the Acquisition of L2 Phonology Progresses” (E)

Lecturer: John Matthews (Chuo University)

As Japanese learners of English begin to overcome the tendency to pronounce a vowel amid target consonant clusters and after word-final obstruents, they appear to do so through the application of a vowel deletion rule [1] that results not only in target-like realizations for these sequences but in deletion errors in forms that had previously been produced correctly (e.g., Ja[ɸn]jese < Japanese, pho[t] < photo). The new insight here is that phonological development does not involve the acquisition of deletion but rather the suppression of epenthesis. Because learners posit lexical representations containing only phonological content that cannot be supplied by the phonology, epenthetic vowels are properly withheld from representations. Genuine vowels in sequences resembling the output of epenthesis are also withheld, a condition that is only observable once epenthesis has been suppressed.

[1] Ross (1994) “The Ins and Outs of Paragoge and Apocope in Japanese-English Interphonology,” *Second Language Research* 10.

「日本語母語話者にとって3人称単数-sはなぜwh移動よりむづかしいのか？」

講師 吉村紀子 (静岡県立大学)

講師 中山峰治 (The Ohio State University)

日本語母語話者 (大学生) の英作文を分析した Yoshimura & Nakayama (2009[1])では、代名詞の主語が初級レベルではほぼ 100%主格であるのに対し、3 人称単数-s は上級レベルで約 55%であった。これは、主格の EPP 素性照合が SPELL-OUT までの普遍的な操作であり、主格付与は問題がないのに対し、-s の出現は L2 に存在する屈折素性[3rd person, singular]が L1 に欠如しているため、PF で形態素-s の挿入に困難が生じた結果であると考えられる。本論では、この統語と形態音韻のインターフェイスの問題について、さらに wh 移動現象と名詞複数形-s の分析を加えて議論する。wh 移動は SPELL-OUT までの派生操作であるから、主格付与と同様に高い習得率を示し、一方、複数形-s は PF での挿入であると考えれば、3 人称単数-s と同様な困難が生じると予測される。果たして、この予測は実証的に証明されるのか。

[1] “Nominative Case Marking and Verb Inflection in L2 Grammar: Evidence from Japanese College Students’ Compositions,” *Proceedings of the 10th TCP*, Hituzi.

「日本語母語話者にとって英語の可算名詞と不可算名詞の区別はなぜ困難か」

講師 稲垣俊史 (大阪府立大学)

日本語母語話者にとって英語の可算名詞と不可算名詞の区別が難しいのはなぜであろうか。Inagaki & Barner (2007[1])は日本語話者は「可算名詞→個別性のあるもの」、「不可算名詞→個別性のないもの」という形式と意味のマッピングができていないと結論づけている。これはインターフェイスの観点からどう解釈できるであろうか。まず名詞の可算性と個別性のマッピングは語彙で起こると考えられる。但し、このマッピングの習得には統語・形態

が関与しており、学習者は DP における数素性[±singular]の現れである形態素-s/-φから語彙意味[±individual]を解釈し、可算・不可算[±count]に結び付ける必要がある。日本語話者の困難点は統語・形態と語彙意味のマッピングであり、統語と形態のインターフェイスの問題が、形態と語彙意味のマッピングを阻害している可能性もある。

[1] “Japanese Speakers’ Acquisition of the Mass/Count Distinction in English: Where Does the Difficulty Lie?” Paper presented at the 12th PEARL 2007, Tainan, Taiwan.

〈シンポジウム E 室〉(11 月 15 日午後)

Invariance and Variability in OT

司会 北原真冬 (早稲田大学)

普遍的な制約と並列処理を核とした簡潔なシステムを備える最適性理論 (OT) は、特に音韻論において大変な発展を遂げてきた。しかしながら実際の音韻現象を観察すれば、この簡潔なシステムでは一見説明がつかない例外や多様性にしばしば出会うことになる。

本シンポジウムでは、OT においてどこまで「不変性 (invariance)」を保ちながら、「多様性 (variability)」を説明できるかについて、4 名の講師が、「例外」「調和的直列性」「類型」「確率」「単一不変ランキング」「並列性」「普遍性」などのキーワードに基づいて論ずる。

OT の簡潔なシステムを起点としながら、多様性を説明するためになされた種々の提案は、簡潔さと記述力の間に妥当なトレードオフを見出しているのだろうか。そもそも「妥当」な着地点を探すことが、OT の進むべき方向なのだろうか。これらの間に答えることを目標にシンポジウムを展開する。

“Invariant Factors in the Core System of OT”

講師 深澤はるか (慶應義塾大学)

最適性理論 (OT) の原点において、並列性と不変性は理論の重要な柱である。UG は普遍的な制約の集合であり、個別言語の違いは制約のランキングの違いによって表される。したがって、ある言語の文法の中では単一不変のランキングが全ての音韻現象を説明する。

また入力から出力への計算は並列的になされ、派生を認めない。

誕生から時を経て、より説明力を増すために OT が発展を遂げる中、この並列処理と単一不変のランキングという基本条件を尊重するために数多くの提案がなされてきた。例えば、対応理論 (Correspondence Theory) や局所的制約結合 (Local Conjunction) などがある。

しかしながら、最近の研究では、“Serial OT”に見られるように、基本条件すら妥協した提案もなされている。最適性理論において並列性と不変性は尊重されるべきなのであろうか。最近の研究を種々比較検討することにより結論を導く。

“Rethinking the GEN Component: Typological Consequences in Parallel and Serial OT”

講師 田中伸一 (東京大学)

言語類型上の体系的空白を説明することは、言語理論の大きな目標の 1 つである。全ての可能な言語形式だけを生成し、不可能な言語形式を排除するのが文法の機能だからである。ゆえに、全ての制約が普遍的であるとの仮説に立つ最適性理論では、制約の相互作用により体系的空白を適格に排除できる点を経験的に検証することが、必須の研究手続きとなる。しかし問題は、その排除をどこで保証するかである。体系的空白を生む文法上のメカニズムとしては、従来から、制約の非対称性や序列の非対称性 (つまり CON の制限) が知られてきた。本発表ではさらに、局所的最適性

(EVAL による GEN の制限) が有効であることを主張する。その有効性を異化作用に見られるある種の体系的空白に基づいて経験的に検証・証明することにより、局所的制約結合を用いた‘parallel OT’よりも、調和的逐次性を取り入れた‘serial OT’の方が妥当であるとの理論的意味合いを導き出す。

“Exceptions in Optimality Theory”

講師 栗栖和孝 (神戸女学院大学)

例外現象は生成音韻論において研究が遅れており、未解明の課題が多い部分である。最適性理論における例外現象の扱いに関しては幾つかの分析方法が提示されているが、それ

ぞれの分析には長所と短所があり、対立する分析手段の優劣を付けることは不可能である。本発表は最適性理論以前の例外現象の扱いについての簡単な解説から始める。第二に、例外現象が文法構造の解明および理論的分析の比較において示唆に富むことを論じる。第三に、講師自身の研究を踏まえながら、最適性理論における例外現象の分析を概観し、各々の分析の長所と短所を考察する。最後に、例外現象に関わる未解決の問題点にも言及し、例外現象の研究が現在まで浅薄な段階に留まっていることを論じる。本発表は今後の発展的研究に向けて例外現象に対する関心と問題点を共有し、会場全体で建設的な議論を行うための問題提起の機会としたい。

“Probabilities Come in When Talking about Variability”

講師 北原真冬 (早稲田大学)

統計的手法を導入した最適性理論 (OT) と調和度文法 (HG) を中心に最近の研究動向を概観する。候補のセットから最適な形式を選ぶ文法モジュールと、文法の時間的変化を扱う学習アルゴリズムを切り離し、それぞれに確率分布を扱う計算機構を入れて考えると、範疇的でない変化の過程や自由変異に沿うような組み合わせは何かを様々に探求することができる。本発表では特に Boersma and Hayes (2001) の提案とそれに対する批判、そしてさらに批判を乗り越えて新たなモデルが構築される過程を中心に扱う。しかし、時間的・確率的に変動する事象は音声学から音韻論、心理言語学にいたる広い範囲に様々な形で存在している。それらを扱うためにはランキングとその学習アルゴリズムだけでなく、ほかにも確率分布を扱える機構を組み込む可能性を検討する必要がある。制約に直接音声学的な機構を反映させる方法や、候補の集合における局所的な調和度の最大値を確率的に扱う方法の一端も紹介する。

(シンポジウムF室) (11月15日午後)

メタファーと主観性

司会 谷ロー美 (大阪教育大学)

認知意味論は、1980年代以降、Lakoff and Johnson による概念メタファー理論、Langacker らによる主観性 (主体性) の研究を通じて確立されてきた。この意味論が立脚するのは、(i) 言語の意味はその客観的内容のみに還元されず、言語主体の概念化や認知操作を大きく反映する、(ii) 概念化は身体的経験を基盤とする、という基本的見方である。「心」(mind) と「身体」(body) の絶対的分離を前提としてきた西洋哲学的パラダイムを覆す、この新しいパラダイムに基づく研究が、言語学および関連領域で多様に展開されつつある。

本シンポジウムでは、認知意味論における重要概念であるメタファー (比喩) と主観性を巡り、認知言語学、人工知能、認知心理学の各領域における最先端の研究を紹介し、言語と認知主体との関わりを広く眺望する。また、私達が相互に意味を構築し伝達する上で不可避の問題である「間主観性」との関わりを含め、今後の研究課題についても議論を深めていきたい。

「時間のメタファーにおける視点」

講師 篠原和子 (東京農工大学)

概念メタファーに「視点」が関与する一例として、空間的前後の方向性と時間的早遅のあいだの対応関係を取りあげる。これらの概念がどう対応づけられて言語化されるかについては多くの研究があるが、自己の移動や自己の位置などを含む直示的概念の表示を伴わず、かつ IN-FRONT=LATER という対応を示す例は、英語ではごくまれな例外を除いて報告されていない。一方、日本語の「サキ」は、豊富に FRONT 方向を LATER と結びつける (e.g. 「正月よりサキの話」篠原 (2008[1]))。本発表では、このような概念対応が、既知の順序構造をもつ出来事列を眺望する視点による (そのため時間配列的語彙に参照点が特化される) ことを、「サキ」を例に示し、さらに、マラティ語の puDhe (前) /maage (後) の用法から、眺望的視点が時間内の出来事の順序列だけではなく数字列のような順序構造にも適用されて IN-FRONT=LATER の概念対応を引き起こしうることを示す。

[1] 「時間メタファーにおける『さき』の

用法と直示的時間解釈』、『ことば・空間・身体』, ひつじ書房。

「日本語と英語の『間主観性』の差に関する 身体運動意味論的考察」

講師 月本 洋 (東京電機大学)

日本語では、人称代名詞が余り使われず、容器の比喩を初めとする空間の比喩が多用される。これに対して英語では、人称代名詞が頻繁に使われ、擬人の比喩が多用される。これらのことから、日本語母語話者と英語母語話者の間主観性に差があることを示していると思われる。ところで、筆者らの調査で人称代名詞出現数と母音出現率は逆相関の関係にあることがわかった。これは、日本語母語話者と英語母語話者の間主観性の差が主に音声的な差で決まるのではないかということを示唆している。本発表では、この仮説を身体運動意味論(言葉の意味とは(仮想的)身体運動であるという意味論)と脳科学の知見を用いて説明できることを述べる(月本(2008[1]), 月本(2009[2]))。

[1]『日本人の脳に主語はいらない』, 講談社 [2]『日本語は論理的である』, 講談社

「痛みのメタファーの主観性と間主観性」

講師 楠見 孝 (京都大学)

痛みの言語表現, 特に比喩表現と擬態語を支える身体・認知要因と言語要因について、心理学的データ(楠見・中本・子安(2004[1]))に基づいてその主観性と間主観性を検討する。痛みは主観経験であり、痛みの大きさや質を他者に直接伝える手段はない。そのため痛みは、言語表現や表情、行動などを通して他者に伝達される。言語表現をここでは3つに分ける。第一は、痛みが生じた客観的状況を説明することで、例えば「画鋸を踏んで痛かった」という発話は、痛みの原因から結果である感覚内容を想起させる一種の換喩と見なせる。第二は、比喩表現を用いて痛みの主観経験を伝達することである。例えば「刺すような」という痛み表現は、比喩指標「ような」を含み、実際に針で刺されていないため、直喩表現の一種である。第三は、擬態語である。例えば、連打されるような痛みを表す擬態語

の「がんがん」は、鈍器による打撃という痛みの原因と関連する表現と見なすことができる。

[1]「痛みの比喩表現を支える身体感覚と形容語・擬態語の構造」, 『第21回日本認知科学会大会発表論文集』.

2009年9月1日発行

編集・発行 日本英語学会

代表者 原口庄輔

発行所 日本英語学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/elsj/>

〒113-0023

東京都文京区向丘 1-5-2

開拓社内

電話 (03) 5842-8900

印刷所 いばらき印刷株式会社

©日本英語学会 2009

2009 年度会費未納の方へ

会費未納の方は、学会支援機構から送られました振込用紙で納入して下さいますようお願いいたします。2年間滞納されますと、会員規定第3条第4項により自動的に退会扱いとなりますので、ご注意ください。

学生会員の方へ

学生会員登録は継続手続きが必要です。指定された期日までに手続きをなさらないと、通常会員として会費請求されます。(今年度の手続きは2009年4月25日で締め切りました。) 手続きの仕方は学会ホームページをご覧ください。

2009年9月1日

日本英語学会事務局